

地域資源としてのフォークロア : 兵庫県尼崎市の事例から

著者	岡本 真生
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	131
ページ	139-150
発行年	2019-03-12
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027718

地域資源としてのフォークロア*

——兵庫県尼崎市の事例から——

岡 本 真 生**

はじめに

民俗学において、文化財行政と民俗・民俗学をめぐる研究の蓄積は数多くある。1975（昭和50）年に改正された文化財保護法では「民俗資料」から「民俗文化財」へと名称が変更されるとともに、無形文化財の指定がはじまった。このことを契機として、無形民俗文化財に関連する研究が相次いで発表された（岩本1998 a・1998 b, 菊地1999, 才津1996）。また2001（平成13）年以降、ふるさと文化振興事業に関連して、岩本通弥を中心として、「文化の資源化」や「ふるさとの資源化」が検討された（岩本2002, 岩本編2007）。こうした一連の議論は、行政主導による文化振興事業であり、こうした事業に関与する民俗学の在り方については、民俗学の内部でも批判的な議論が行われている。

一方、山下裕作（2011）は「従来の議論が官製の資源化に対する批判に留まっているのに対し、資源化の過程を見ながら、その新しい意味を問い直す」（山下2011:239）とともに、「民俗学が提起しうる健全な資源化の方法論の構築」（山下2011:239）を検討する必要性を提唱している。なお、山下（2011）は具体例を3つ取り上げているが、あくまで「ここで取り上げた各地の『資源化』は、農村の過疎高齢化に伴う現実的な問題の解決を目的」（山下2011:265）としたものである。

しかしながら、地域資源化は、近年、農村にかぎられる問題ではなく、よりひろい地域において

必要とされている。そこで、本稿では、山下（2011）が示す議論と問題意識を共有しながら、民俗学が担う地域資源化の方法論について検討していく。

ところで、文化庁が2007（平成15）年度から実施している事業に、「歴史文化基本構想」がある。同構想の主眼は、文化財の指定・未指定の文化財をすべて含めた文化財を「関連文化財群」として設定し、「総合的」に文化財を把握することである。

この歴史文化基本構想という新しい文化財関連事業／制度に対して、大江篤（2011）は、民俗学がいかに貢献できるのか、その可能性について論じた。なお、大江（2011）は、同論文で「民俗文化」に対して、「民俗文化」や「民俗文化財」、「当たり前」など複数の表現を用いている。本稿では、これらに対する統一した総称として、「フォークロア」を用いる。

では、フォークロアは地域資源として、どのように活用できるか。これが、本稿で明らかにしたい、大きな問いである。

そこで、この問いを解明すべく、本稿ではつぎのように論じていく。まず1. では、大江（2011）を具体的に検討していく。つづいて2. では、園田学園女子大学（兵庫県尼崎市）で、大江氏が2013（平成25年）度から主導している「地域資源を活用したまちづくりモデル構築のための基礎的研究」を取り上げる。1. が、大江氏の理論編であるとすれば、2. はまさに、実践編である。そして、3. では、2. の大きな具体的成果として、神戸新聞出版センターから2016（平

*キーワード：地域資源、フォークロア、ストーリーテリング

**関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

成 28) 年に刊行された『尼崎百物語』を取り上げ、地域資源としてフォークロアを活用していく実践を検討する。4. では、理論と実践をふまえたうえで、本稿で掲げた問いを検討していく。その際、フォークロアを地域資源として活用していく一例として、アメリカでは 1970 年代から実践されている「ストーリーテリング」の活動を紹介する。さらに、1990 年代に尼崎市内で実施された「ネオ・フォークロア運動」を振り返ることで、尼崎市では「ストーリーテリング」を実践しうる可能性を内在していることを確認していきたい。

1. 歴史文化基本構想と民俗学

フォークロアは、地域資源として、どのように活用できるか。大江篤は、論考『「歴史文化基本構想」と民俗文化-民俗学のなすべきこと-』(大江 2011)において、この問いに対する方向性を示唆している。ここでは、同論文の内容を中心に検討していく。

まず、「歴史文化基本構想」とは、「地域や人々の暮らしの中に埋もれた文化財を総体として把握」(大江 2011: 71)し、「それらの文化財に新たな(潜在する)『価値』を発見することが求められる」(大江 2011: 71)ものである。しかし、歴史文化基本構想では「新たな『価値』」を必ずしも明確に示していないと、大江(2011: 71)は述べている。

また、文化財の「総合的把握」に関する調査方法に関しても、つぎの2点を指摘している。まず、1点目は、「集落を類型化して代表例を調査すると無形民俗文化財の総合的な把握は困難となる」(大江 2011: 74)点である。2点目は、「市民等の参加による調査を実施すると、市民が継承していきたいと考える文化財と専門家が価値が高いと捉える文化財が乖離する」(大江 2011: 74)という点である。

これらの問題点に対する解決策の一例として、大江は、兵庫県篠山市で策定された歴史文化基本構想をとりあげる。篠山市における特色は、城下町、街道集落、農村集落のそれぞれのモデル地区において、「景観・まちづくり」、「建造物・町並

み」、「農村・自然環境」、「民俗文化」、「文化財防災」に関する調査が実施され、「文化財の『総合的把握』は、集落カルテを作成し、歴史文化のデータベースを構築していく仕組みをつくった」(大江 2011: 75)点であったという。また篠山市は、発見・評価・活用・継承という4ステップをモデル化しており、ここでは、「どのような文化遺産を『歴史文化まちづくり資産』として発見していくかが重要である」(大江 2011: 76)こともあわせて指摘している。そして発見していくフォークロアの具体例として、①大寺地区藤阪の祭礼-欄宜講-、②伝説を構成する景観、③狐の伝説、④篠山城下町の七不思議、4つの事例をとりあげている。

それらは、たとえば、②伝説を構成する景観では、まず住民へのアンケートや文献調査、また伝説の収集から延べ 124 の事例を収集した成果をふまえ、伝説や昔話は、『文化財』や『歴史文化遺産(資産)』という認識になり難い」(大江 2011: 79)が、「生活に根差した文化として重要である」(大江 2011: 80)ことを主張している。また、④篠山城下町の七不思議では、七不思議だけでなく、怪異が発端となり祀られた地藏盆が、地域の活性化に貢献している事例を紹介している。

こうした事例をふまえ、「地域で暮らす人々の現在の課題を理解するためには、『いま』『ここ』での暮らしとともに、記憶にとどめられているものを可能な限り記録することが重要である」としたうえで、「文化財」や「文化遺産」は「当たり前」の生活を日々営んできた人々にとっては、むしろ遠い存在であり、「小さなストーリーを積み重ねることから大きなテーマに繋げていく(を立ち上げていく)」(大江 2011: 86)、まさに、これこそが、民俗学の強みであり、「民俗学の役割は大きい」ことを強調している。

つまり、大江(2011)は、地方自治体によって見落とされがちな「民俗文化」や「民俗文化財」、「当たり前」といったフォークロアを、「新たな『価値』」の具体例として取りあげ、民俗学の役割について検討しているのである。フォークロアは地域資源として活用できる、この可能性を指摘した点において、先駆的であるといえよう。

では、ここでみてきた大江氏による理論は、実

際、どのように実践されたのであろうか。2. では、大江氏が主導した園田学園女子大学の地域志向教育研究「地域資源を活用したまちづくりモデル構築のための基礎的研究」の研究と成果を検討することを通して、理論の実践を明らかにしていく。

2. 「地域資源を活用したまちづくりモデル構築のための基礎的研究」

本章では、上でみてきた理論にもとづいた、大江氏による実践を取り上げる。

「地域資源を活用したまちづくりモデル構築のための基礎的研究」は、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC 事業）に採択された園田学園女子大学の「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値プログラム」における地域志向教育研究の一つとして、2013（平成 25）年度から採択された共同研究である。

まず、「研究の課題意識」は、つぎのとおりである。

尼崎市は、工場や自動車の排気ガスによる大気汚染公害を経験した「公害のまち」などイメージが悪いことが課題の一つである。尼崎市では、シティプロモーション推進部を中心に「あまらぶ大作戦」を展開している。「街を好きな人に出会うとその街が好きになる」というコンセプトのもと、多彩で多様な地域資源の発掘と情報発信が試みられている。尼崎市のシティプロモーション指針には、

1. 実態と違うイメージを持たれている。
2. まちの魅力が十分に伝わっていない。
3. 地域の個性（エリアごとの特徴）が魅力に結びついていない。
4. 子育てファミリー世帯の転出超過の原因と考えられる治安や教育の問題。

の4つの課題があげられている。魅力あるまちづくりを推進していくことが必要であると考えられる。（「地域志向教育研究申請書」代表者：大江篤）

ここにも、「魅力あるまちづくりの推進」には

「地域資源の発掘」が重要であることが明記されている。

つぎに、同計画書における「概要」は下記のとおりである。

地域に住む人々とともに地域の「良さ」を発見し、市内外からの方々に情報発信できる仕組み作りを進めていく。地域の資源の代表的なもの文化財（歴史文化遺産）と思われがちであるが、伝説や民話など、地域に潜在する資源は数知れない。ところが、当り前の暮らしに地域資源が潜んでいるという認識が地域住民には稀薄である。このことは、行政の担当者も同様である。なにげない当り前の生活が地域の文化を形成し、地域の人々が長い歴史の歩みの中で全身で受け継いできた。これからの社会において、当り前の暮らしをどのように継承していけばいいのか。持続可能なまちづくりを構想するための方策を構築してかなければならない。そのために大学は地域に寄り添いながら、共に地域の資源を発見し、課題解決を目指していくことが必要である。本事業では、杭瀬小学校区学習センター運営会議と連携し、調査・研究した結果をもとに地域の活性化をめざす。（「地域志向教育研究申請書」代表者：大江篤）

つまり、「地域に潜在する資源」は「当り前の暮らし」や「当り前の生活」のなかに存在しており、それこそが「地域資源」であると主張している。しかし、地域の人びとには、そうした意識が希薄であることを指摘している。これは、大江（2011）が掲げた問題意識と同様である。

ところで、尼崎市では、こうした伝説や民話などを集める活動が、1990年代前後に行われていた。たとえば、長年にわたって図書館司書をつとめた羽間美智子は、1989（平成元）年に尼崎市立北図書館で「尼崎の伝説展」を企画開催し、1991（平成3）年には手作りの冊子『尼崎の伝説』を350部限定で作成・配布した（羽間1994）。『尼崎の伝説』には、不思議な話の典拠史料・地誌・伝説が明記されている。その後、同書の内容は、当時の聞き取り内容を補足し、尼崎郷土史研究会によって、同会会報『みちるべ』第33・34号で、

特集号「尼崎の伝説」として紹介された。しかしながら、会報『みちしるべ』も会員に配布されただけであり、地域資源としてひろく尼崎市民に周知されることはなかった。

そこで、大江氏を代表とする共同研究は、こうした研究蓄積を「地域資源」としてひろく市民に周知させることを目的として、尼崎市域6行政区に伝わる、怪異・靈験譚、あるいは妖怪に関する話などいわゆる不思議な話を収集した。その際、学外研究協力機関の尼崎市地域研究史料館の関係者や、授業で学生を引率した先で出会った地域の人びとから聞き取りした情報も追記した。その結果、計209件もの不思議な話を集積したエクセルデータが完成した。そのデータをもとに、共同研究者がそれぞれ追加で現地調査や史料調査を行った。つまり、尼崎市内の地域資源の発見には、民俗学的手法も活かされたのである。

3. 成果としての『尼崎百物語』

2. でみた実践から得られた、とくに大きな成果が『尼崎百物語』である。2016（平成28）年4月に、尼崎市の市制100周年を記念した一事業として、神戸新聞出版センターから刊行された。『尼崎百物語』は、民俗学や古代史学、中世文学や近世史等それぞれ異なる専門分野の研究者7名

によって執筆された¹⁾。

100話にもものぼる不思議な話は、均等に話がわりふられているわけではなく、尼崎市の行政区6地区に分けて紹介されている。6地区とは、中央、小田、大庄、立花、武庫、園田である。それぞれ中央地区では30話、小田地区では19話、大庄地区では10話、立花地区では12話、武庫地区では9話、園田地区では20話が収録されている。若干、中央地区に話の偏りがみられるのは、神社仏閣に関係する不思議な話が集積しているためである。それぞれの話は、基本的に見開き1ページでまとめられているが、なかには4ページにわたるものや、2話分として紹介されているものもある。

また、各地区のはじめには、それぞれの地区の地図が挿入されている。不思議な話にまつわる住所が明確であれば、可能な限り地図に明記されている。これは、読者が『尼崎百物語』を片手に、尼崎市内の地域資源を訪れることができるようにするためである。

具体的には、神社仏閣にまつわる縁起や伝承、源義経や豊臣秀吉など歴史的な人物と尼崎との関り、ある場所と食べ物の禁忌にまつわる話、ご利益をもたらす地蔵などが収録されている。地蔵に関していえば、個人の家で祀られていた地蔵に関する話（「96 壁の地蔵」）も収録されている。この地蔵は、元の文献にも所在地が記載されていなかったため、「阪急の踏切近く」という言葉を頼りに、Google Mapで見当をつけたうえで、実際に現地を訪ね歩き、家の住民に直接聞き取りをしたものである。

個人の経験にもとづく不思議な話も収録されている。たとえば、「57 狐の化けたはなし」では、1983（昭和58）年から翌年にかけて、「今北のおばあちゃん」という個人から聞いた、狐にまつわる3話が紹介されている（今北のおばあちゃん1984）。また、「99 人魂を見たはなし」も、尼崎市在住のお年寄りから聞いた話を取り上げている（兵庫県立猪名川高等学校の地域歴史文化委員会1993）。

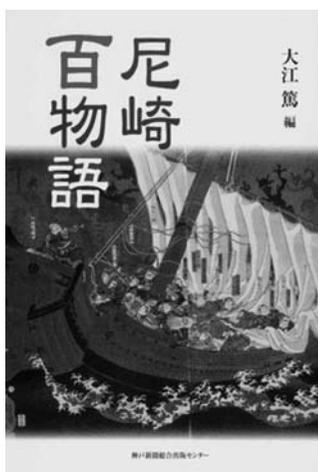


図1 『尼崎百物語』の表紙

1) 執筆者は、つぎのとおりである。園田学園女子大学の大学関係者として4名（大江篤、久禮旦雄、久留島元、岡本真生）、また尼崎市地域研究史料館の研究協力者として3名（辻川敦、中村光、河野未央）の計7名である。

そして、100話の後ろには、園田学園女子大学の大学関係者4名が、それぞれの研究関心のもとで執筆した論考が4本取められている。

刊行後は、『尼崎百物語』に関する講演等を学内外で実施し、尼崎市内の地域資源について、ひろく周知をはかった。たとえば、尼崎市で開催されている比較的大規模な市民講座「みんなのサマーセミナー」では、執筆者のうち3名が「お化けの学校－尼崎百物語－」を開講し、未就学児童から高齢者までの老若男女に、具体的な地域資源について講演した。また園田学園女子大学の公開講座「歴史セミナー」では、執筆者らによる講演を計18回実施した。公開講座の参加者のなかには、『尼崎百物語』に収録された地図を片手に、実際に場所を訪れた人や、100話以外の話を執筆者に教えてくれる人もいた。このことから、地域資源は今後もさらに発見され、活用されていくと推測される。

2017（平成29）年度以降は、『尼崎百物語』の参考とした史資料の原文の調査を進めている。100話だけでなく、もとのデータベースに立ち返り、それぞれの話を原文で掲載するデータベースの作成を計画している。このデータベースは、来年度以降にインターネットで公開予定である。地域の人びとには、公開された情報を参考に、尼崎市内でさらに新しいフォークロアを発見してもらうことを望んでいる。新しく発見したフォークロアをデータベースに追記して、「地域資源」を増やしていく予定である。

またデータベースを通じて、地域資源の「活用事例を蓄積することにより、豊かで深みのある地域学習が可能となる」（大江2017:31）と述べるように、大江氏は、本データベースを小学校社会科の一教材として用いる試みも視野に入れている。

4. 地域資源とストーリーテリング

3. までの、大江氏の理論と実践についてみてきた。上記をふまえ、ここでは、「フォークロア」を地域資源として活用する方法について提言する。

さて、ここまで「フォークロア」と称してきた

が、そもそも「フォークロア」とは何か。

島村恭則は、世界における民俗学史をふまえたうえで、「民俗」を、「民俗学が対象把握のために設定する概念で、何らかの社会的コンテクストを共有する人びとの一人としての個人の生世界において、生み出され、生きられた経験・知識・表現のこと」（島村2018:22）と定義する。つまり、この定義によれば、「フォークロア」として対象化できる範囲は、かなり広く、一人の人間の生活世界において、生み出され、生きられた経験・知識・表現は、すべてフォークロアたりうるのである。

ただし、個人の「経験・知識・表現」を資源化することは、何らかの機会がない限り、容易ではない。フォークロアを地域資源として活用するためには、フォークロアを資源化する何らかのフレームワークが必要となる。そこで本稿では、フレームワークとして、「ストーリー」を提唱したい。ストーリーとは、人々が自らの経験・知識・表現、つまりフォークロアを資源化する一つのフレームワークである。

そして、ストーリーを生み出すパフォーマンスとして、「ストーリーテリング」に注目したい。ストーリーテリングとは、文字通り、ストーリーを語ることである。とはいえ、ストーリーが自然と生まれるとは限らないため、ストーリーを生み出す機会を設ける必要がある。その一例として、「ストーリーテリング」があげられる。フォークロア、すなわちストーリーをストーリーテリングする。この行為が、まさに地域資源の掘り起こしに繋がるのではないだろうか。

こうしたストーリーテリングを活用して、町おこしに成功した例がアメリカには存在する。南アパラチア山岳地帯の中央、テネシー州のジョーンズボロという斜陽の町である。ジョーンズボロは、1960年代後半、隣接するジョンソン・シティのショッピングモールや娯楽施設に顧客が流出したことで、町の経済は破綻寸前に至った。閉店した廃屋は、修理されず荒れ放題になったという。

そうしたなか、「ジョーンズボロの将来は、町のもつ歴史を活かすことだと判断した指導者たちは、1970年代までに古い町並みを保存し、歴史

的なメインストリートを修復し、観光と結びつけた経済の新規巻き直し計画を実行」(スミス 1992:5) することになった。ジョーンズボロ市民基金が創設され、週末は町の歴史と伝承を祝う子ども会による祭典が開催された。さらに新たな行事を開催しようという気運のなか、ジョーンズボロの住民の一人でイベント企画に携わっていた男性高校教師(ジミー・ニール・スミス)に思いついたアイデアがあった。それこそが「ストーリーテリング」である。

このアイデアがスミスに生まれたのは、スミスが生徒数人を車で引率していた最中、カー・ラジオを聞きながら談笑していたときであったという。ラジオでは、ストーリーテラーのジェリー・クラウアーがミシシッピのアライグマ狼のホラ話をしていた。スミスも生徒も、ラジオから聞こえてくるストーリーに引き込まれた。爆笑のなか、「『ストーリーテラーたちを全米から集めて、ジョーンズボロに連れてきたらどうだろう』ね」(スミス 1992:6)、スミスは生徒に提案した。当時は、彼の発言を誰も気にとめなかったが、ストーリーテリング・フェスティバルを開催するというアイデアは頭の中から離れなかった。1973年1月、彼はこのアイデアを、ジョーンズボロ市民基金委員会へ提案した。委員会側は彼の提案を受け入れた。

立案者のジミー・ニール・スミスは、『ストーリーテラーたち—現代アメリカのフォークロア—』という本を執筆している。この本には、スミスがイベントを提案し、過去の実例もマニュアルもないなかで、第1回が実現された経緯が記されている。また、「南アパラチア山岳地帯のお話」をはじめ、「ユーモアとウィットあふれるお話」、「はるかな昔と彼方のお話」、「不思議なお話」、「アメリカの伝承民話」、「家族・知人のお話」、「実話とファンタジーの人情話」、「経験から生まれた話」という見出しのもとに、20人のストーリーテラーたちの人生と密接に結び付いた、彼らのストーリーについて詳細に記述している。

スミス(1992)によれば、「ナショナル・スト

ーリーテリング・フェスティバル」というネーミングは、当時、全米中どこにも存在しない、目新しいネーミングのものであったという。記念すべき第1回は、1973年10月の第2土曜日の夜に開催された。東テネシーの地域の人びとが、1000人以上集まったという。高校の体育館のステージ上には、あの時、カー・ラジオで話していたアライグマ狼師が登場した。「聴衆は足を踏み鳴らして小躍りし、飽きる様子も見せなかった」(スミス 1992:7) という。翌日には、農作業で使う古い馬車を、郡庁舎前の広場に引っ張り出し、この馬車を舞台として、様々なストーリーが語られた。登場したストーリーテラーたちは、アーカンソーの元国会議員から、テネシーの銀行員、大学教授、ノース・カロライナ西部の農民たちといった職種も様々な人びとであったという。

ストーリーテラーたちの具体例として、ここでは、スミス(1992)に紹介されている3人を取りあげる。

まず、ドック・マッコネルである。彼は、第1回で聴衆として参加したフェスティバルで様々なストーリーに聞き入ると同時に、自分自身が「冗談屋、人を笑わせるだけの大口たたきにとどまらず、自分がストーリーテラーであることを自覚した」(スミス 1992:13) という。翌年の第2回「ナショナル・ストーリーテリング・フェスティバル」では、イベントのハイライトとして、ストーリーテラーを演じた。彼自身は生まれ故郷の南アパラチア山岳地帯の民間伝承、メディシン・ショウ²⁾に魅せられたことが契機で、病院管理の主任を務める傍らに、時間の合間を縫っては田舎を訪ねまわり、ショウの復活に取り組んだという。彼の語るストーリーには、ドックの実弟のステイマーが登場する。それは、ジョン・モークの雑貨屋で、ステイマーが「ロバの卵」を買う話である。つまり、彼自身がフィールドワーカーとして現地を訪ね歩き、各地のフォークロアを発見し、それをもとにしてストーリーを構築したのである。

2人目は、キャスリン・ウィズダムである。彼

2) メディシン・ショウとは、廉価なウイスキーに適当な混ぜ物を混入してつくられた「特効薬」を、医者を自称した巡回商人が定期市などで販売したショウのことである。

女は不思議な話、とくに幽霊話に興味を抱いた。では、なぜ、彼女が幽霊話に興味関心を抱くようになったか。それは、自宅にて、実際に幽霊と出会ったという彼女の経験に端を発する。一家は、自宅で足音を出す幽霊にジェフリーと名づけ、受け入れた。キャスリンは、超自然的な世界について、さらに知りたいと強く望み、ハンチングトン・カレッジの民俗学教授、マーガレット・ギリス・ファイ女史の共同研究者となった。そして、8年間、キャスリンは実際にアメリカ南部をフィールドワークして幽霊話を収集し、「南部幽霊話の権威と認められるまでに至った」(スミス 1992: 205) という。

1974年、キャスリンは地域振興会部長として働いていたとき、スミスから電話で、第2回ナショナル・ストーリーテリング・フェスティバルの出演を依頼され、ストーリーテリングをすることになった。彼女にとって、これがパブリックな初めてのパフォーマンスとなった。彼女は舞台上で、彼女が収集したストーリーを語った。つまり、ドック同様に、キャスリンも自らの人生をもとに、ストーリーを語ったのである。

つづいて、ボルチモア市内の学校で教師兼司書として31年間働いたメアリー・カーター・スミスを紹介する。職を辞した1973年以降は、「お話と歌を正義と人間性のメッセージとして、ボルチモアはもとよりアメリカ全土、そして世界中の学校や図書館、さらには病院や刑務所において演じてきた」(スミス 1992: 249) という。

なぜ、教師をつとめたのか。それはメアリーが小学3年生のとき、担任の先生にプレゼントをあげたときの経験に起因する。その経験自体が、彼女のストーリーの一部となった。彼女の経験の一部を紹介する。

黒人の遺産について学ばば学ばほど、子供心にも不正、憎しみ、偏見という数世代にわたって黒人を舐んできたものに気がつき始めました。それは私がまだ小学校3年生だったときのことです。クリスマスのとき、子供たち全員で担任にプレゼントすることになりました。祖母は私に買い物に行くようにと、1ドルくれました。そこで、ピンクの縁取りがかった白いハン

カチを買い、紙に包んで学校へ持って行きました。

私たちは先生にプレゼントするため、整列しました。そして、私の前の可愛い白人の子がプレゼントを渡すと、先生はそれを開いて微笑み、「どうもありがとう」といいました。ところが私がプレゼントを渡すと、先生は顔を真っ赤にして、私の贈り物を親指と人差し指でつまんで、クズ籠に投げ捨てました。それから、先生はすぐに私の頭越しに目をやって、後続の可愛い白人の女の子に微笑んだのです。

放課後、私は泣きながら家に走って帰りました。ママ(祖母)に、先生はどうして私にあんなことしたの、と尋ねました。すると、台所のストーブのそばにいた祖母は私を抱いてひざに乗せ、「いい子だからお聞き。それはね、おまえが黒人だからなんだよ。世の中には相手が黒人だってことが、我慢できない人もいるんだよ」といいました。あの教師がした汚い耐え難い仕打ちと偏見を、私は決して忘れることはできませんでした。ほんの幼子であったにもかかわらず、以後も経験する憎しみに立ち向かうため、私は闘いを挑みました。(スミス 1992: 252-253)

ここでは、メアリーの経験が、ストーリーに影響していることがわかる。そして、彼女は、自身の経験をストーリーとして語っているのである。彼女によれば、ボルチモアのモーガン州立大学で、黒人女優のジョアンナ・フェザーストーンが詩を朗読・詠唱したことも、彼女がストーリーテラーになることを強く望んだ契機であったという。

その後、メアリーは勤務校で3年間サバティカル休暇をとり、ストーリーテラーとして各地でパフォーマンスを行った。その一方で、「自らの遺産を発見」(スミス 1992: 255) すべく、しばしばアフリカに渡り、現地住民の文化を直接体験した。

ところで、メアリーの人生では肉親が相次いで亡くなった。ある時、彼女の一人息子も何者かによって、殺された。それでもストーリーテラーとして活動を続けた彼女には、ストーリーテラーと

しての依頼が次々に舞い込んでいた。息子の死後7年目、ちょうど母の日に、彼女はボルチモア刑務所の若い女刑囚たちにストーリーテリングをした。その後、女刑囚がメアリーに声をかけ、彼女の息子を殺した罪を謝罪した。ついに、彼女は息子を殺した殺人者を許した。彼女はストーリーテリングの場では滅多に導入の口上をしないが、例外もある。落ち着きのない高校生の前で話をするとき、生徒の顔が息子に重なってみえたことで、息子がバーで刺殺されたこと、そして彼女自身が体験した苦悩を語った。彼女のストーリーに対して、落ち着きのなかった生徒達も聞き入り、感想を述べたという。

もちろん、本や作品から影響を受けて語るストーリーテラーも存在するが、別のストーリーテラーはつぎのように語る。

私は家系伝説や生まれ育った地域にまつわるお話を語ります。それというのも、私たち全員の存在も私たちをとりまくお話も重要なのだということに気づいてもらいたいからです。私たちは振り返り、過去に立ち返って、当時のお話や価値観、自分たちの生きざまにかかわるお話に再会すべきです。自分の人生について語るとき、私は聞き手たちに鏡を掲げ、聞き手たちの記憶を揺り動かし、彼ら自身の人生を彩る昔話を見いだすことができるように務めています。(スミス 1992: 442)

つまり、ストーリーテリングとは、ストーリーテラーたちが経験してきた人生であり、即興的なアートである。そして、「語り手と聞き手両者に働きかける共同創造のプロセス」(スミス 1992: 418)である。

ストーリーテリングの勃興を先導していくため、スミスは国際ストーリーテリング協会を発足させた。この協会は、今日に至るまでストーリーテリングに関する活動の中心を担っている。2018年は10月5日から7日にかけて、第46回目の

「ナショナル・ストーリーテリング・フェスティバル」が開催された³⁾。

すなわち、複数の参加者が、自らの日常生活や仕事を語っている。これこそが、まさに「フォークロア」であり、地域住民自身による「地域資源」の発見と活用ではないだろうか。

こうしたジョーンズボロのストーリーテリングという試みは、日本においても展開することができるのではないだろうか。そして、この場合、実は、かつて尼崎市内でも、これに類似した試みとして、「個人の経験にもとづく語り」が注目されていた。1993(平成5)年から始動した「ネオ・フォークロア運動」がそれである。

尼崎市では、1980年代から文化振興事業につとめていた。当時、「活気あふれる健康都市づくり」を市制推進の基本テーマとして提唱していた尼崎市では、文化行政をより積極的に推進すべく、尼崎市文化健康推進本部がつくられた。市長部局を主体とした動きは、当時はまだ全国的にも珍しいものであった(竹田 1993)。当時、尼崎の文化のキーワードとして、「近松門左衛門」が取り上げられていた。これは、尼崎市内の広済寺に、近松門左衛門とされる墓が所在することに由来する。市内各地には近松門左衛門に関する記念碑や案内板が、尼崎市を通過する名神高速道路には浮世絵風の芝居頭の絵入りの標識がたてられ、「近松のまち・あまがさき」は一般的に受け入れられていた(財団法人あまがさき未来協会 1996)。

そうしたなか、「近松門左衛門」というキーワードを提案した人物によって、「市民自らが体験的に身近な街の歴史を書き留める運動を起こしてはどうだろう(財団法人あまがさき未来協会 1996: 207)」という提案がなされた。これを提案した人物こそ、文化人類学者であり、財団法人あまがさき未来協会まちづくり研究所研究員を当時つとめていた米山俊直氏であった。米山氏は、江戸時代の文豪として知られる近松門左衛門と、現在を生きる人々を結びつけることに限界を感じていた。そこで、つぎのように考えたという。

3) 2018年のナショナル・ストーリーテリング・フェスティバルについては、つぎのwebサイトを参照した。International Storytelling Center, 2018, "National Storytelling Festival," International Storytelling Center (Retrieved, October 17, 2018, <http://www.storytellingcenter.net/>.)

(近松) 門左衛門は何か事件が起こると、その現場に行き、取材してそれを材料にして脚本を書いている。いわば事件記者のようなことをしているのである。それが有名な心中ものなどの原点になっている。よし、それなら、「市民がみんな近松になろう」というアイデアではどうだろう。市民が自分で自分たちの歴史を書き留める運動はどうだろう。

私たちは、日常生活をただ平板な繰り返しだけで生きているように見えるけれども、実はそうではない。さまざまな出来事につかかって、人間としてそれに感情的に反応している。(中略)

一人ひとりの、そのような経験を記録してゆくことが、市民文化を豊かにするきっかけを作るのではないだろうか。それを機縁にして、そこから新しい市民文学が誕生するのではないだろうか。(財団法人あまがさき未来協会 1996: 2-3)

この提案を機に、尼崎市の外郭団体であった「財団法人あまがさき未来協会」では、1993年に、「尼崎のネオ・フォークロアに関する研究会」を設立した。メンバーは、社会教育や地域文化・地域史にかかわる研究者や尼崎市職員・未来協会職員の計14名であった。メンバーの参加経緯はさまざまであったが、活動を通して「各メンバーは自身の専門領域ごとに、自分なりの考えも築きあげることができた」(財団法人あまがさき未来協会 1996: 208) という。

研究成果は、本として出版することが決まっていたため、予め決めた目次に沿って聞き取り調査が行われたという。テーマは農業や漁業をはじめ、町工場、商店街、言い伝え、噂話など広いジャンルで、尼崎の深い部分に関係する具体的な内容が選ばれた。またアンケート調査を希望するメンバーによって、尼崎市民の464名に対して、当時、若者の間で話題になっていた「口裂け女」「トイレの花子さん」「縁切りスポット」等に関するアンケート調査も実施された(1994年7月～8月)。

調査研究をすすめるとともに、3年間で合計22回の会議が開催された。そのなかで、当初は漠然

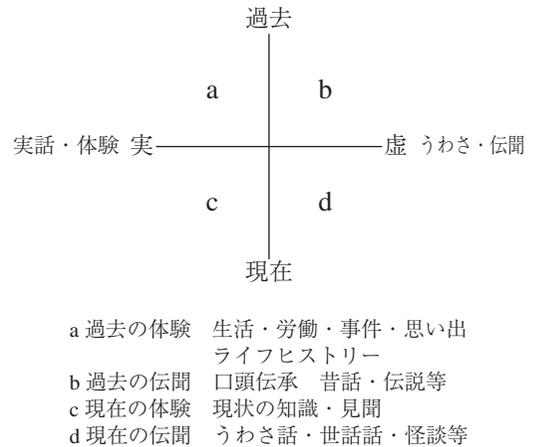


図2 ネオ・フォークロアの対象 (出典：財団法人あまがさき未来協会 1996)

としていたネオ・フォークロアの対象は、図2に示されたようにモデル化され、具体化されていった。

そして、ネオ・フォークロアは、新しい文化運動として、つぎのように定義された。

人々が、そのときどきに感じ、考えていることがら、あるいはその記憶に伝わるさまざまなことがら、通常は聞き取りによってしか記録に残し得ないこれらのことがら—口頭伝承(昔話・伝説等)やうわさ話、その人自身の過去および現在における体験などを聞き取り、記録に残していく。

その対象は、特定範囲に限定しない。過去と現在、虚と実のあらゆるフィールドにわたって、人々が話したい、聞きたい、語り伝え記録に残したいと望むものを、ネオ・フォークロアの対象とする。

この参加者自らが望む対象を聞き取りテーマとすることで、一人ひとりの小さなこだわりを大切に、育て、そのことによって新たな何かを発見していく。この調査と発見の輪に人々が自発的に参加し、ネットワークを育てていく新しいスタイルの文化運動、これを「ネオ・フォークロア」と名付ける。(財団法人あまがさき未来協会 1996: 19-20)

つまり、ネオ・フォークロア運動とは、地域の

人びとの日常や出来事を言語化し、記録することである。特に注目すべきは、この運動の主体が研究者ではなく、地域の人びとである、と考えられた点である。

市民が主体となって、自らの選ぶ身近なテーマについての聞き取りやフィールドワークに足を踏み出し、それによって自分たちの足元を見つめ直していく。ネットワークを結びながら、なにげない何かを発見すること、それは結局、自分自身のアイデンティティを発見し再認識することにほかならない。(中略)

市民が、自発性にもとづいて自らの足元を見つめ直すこと、それは、地域社会の課題に目を向け、主体的に関わっていくことにつながる。市民の身近な関心を軸に、地域を見つめ直す参加型のネットワークが広がっていく。これが、ネオ・フォークロアのめざす、地域の活性化である。(財団法人あまがさき未来協会 1996: 23-24)

つまり、ネオ・フォークロア運動とは、ジョーンズボロにおけるストーリーテリングと同様に、「個人の経験の語り」の重要性が意識された、活性化を目指した運動であったのである。

平成4年12月には、「いま、なぜ都市のフォークロアか」というタイトルで、国立民族学博物館で『都市のフォークロア』を出版した井上忠司と、実際にネオ・フォークロア運動に参加した米山俊直氏によって、京都で対談が行われた。この対談では、「フォークロア」が意味するものが検討され、尼崎市におけるネオ・フォークロア活動こそが、まさに「新しいフォークロア」であることが議論された(井上・米山 1993)。

しかしながら、ネオ・フォークロア運動は長く継続されることはなかった。当時、積極的に運動に参加していた尼崎市立地域研究史料館館長の辻川敦氏は、運動が衰退した主な原因は、調査者としての後継者が育たなかったことであるという⁴⁾。

もちろん、調査者の後継者を育てることは必要

である。そのためには、まず、地域に関心を向けてもらわなければならない。そのためには、興味を引きつけるストーリーが必要であるのではないだろうか。そして、ストーリーとは、個人の経験にもとづき、創出されるものである。これを提示してくれる地域の人びとを増やしていくことが大事である。

そこで、個人に「フォークロア」を語ってもらう機会を何らかの形で提供し、それぞれの「個人の経験の語り」を披露する行為としての「ストーリーテリング」を推進していくのはどうだろうか。すなわち、市民参加型のストーリーテリング・フェスティバルの尼崎バージョンを展開するのである。ここに、尼崎らしさも創出されるのではないだろうか。

むすび

本稿では、フォークロアは地域資源として、どのように活用できるかという問いのもとに、大江氏による民俗学の知見を活かした理論と実践、さらに成果について検討してきた。また、フォークロアを地域資源として活用する具体例として、アメリカのジョーンズボロにおける「ストーリーテリング」の試みを紹介した。あわせて、90年代に尼崎市で起こった「ネオ・フォークロア運動」をとりあげることで、すでに尼崎市では、ストーリーテリング事業の展開に寄与しうる下地が存在していることを明らかにした。

以上から、フォークロアは新しい定義のもとで、地域資源として十分に活用できるといえよう。ナショナル・ストーリーテリング・フェスティバルを提案したジミー・ニール・スミスは、「ストーリーテラーになるには、何ら秘訣も秘薬も魔法の杖もない。我々には幾多の能力が備わっていて、呼び覚まされるのを待ち受けている」(スミス 1992: 455)と語る。いちはやく文化財行政に取り組んだ尼崎市においても、ストーリーテリングでストーリー、すなわち地域資源を市民自らが集め、語り合うことによって、市民参加型のまちづくりに一歩近づくことができるのではな

4) 尼崎市立地域研究史料館館長の辻川敦氏への聞き取り(2018年10月1日に実施)。

いだろうか。

参考文献

- 尼崎郷土史研究会, 2005, 『みちしるべ』 33.
- 尼崎郷土史研究会, 2006, 『みちしるべ』 34.
- 井上忠司・米山俊直, 1993, 「対談 いま、なぜ都市のフォークロアか」『TOMORROW』 26: 46-63.
- 今北のおばあちゃん (吉岡素子), 1984, 『今北のほんのすこしむかし』 私家本.
- 岩本通弥, 1998 a, 「『民俗』を対象とするから民俗学なのか——なぜ民俗学は『近代』を扱えなくなってしまったか」『日本民俗学』 215: 17-33.
- , 1998 b, 「民俗学と『民俗文化財』とのあいだ——文化財保護法における『民俗』をめぐる問題」『國學院雑誌』 99(11): 219-231.
- , 2002, 「『文化立国』論の憂鬱——民俗学の視点から」『神奈川大学評論』 42: 95-103.
- 岩本通弥編, 2007, 『ふるさと資源化と民俗学』 吉川弘文館.
- 大江篤, 2011, 「『歴史文化基本構想』と民俗文化——民俗学のなすべきこと」『御影史学論集』 36: 69-89.
- , 2017, 「小学校社会科と民俗学——兵庫県の民俗文化財を中心に」『地域連携推進機構年報』 4: 15-32.
- 大江篤編, 2016, 『尼崎百物語』 神戸新聞総合出版センター.
- 菊地暁, 1999, 「民俗文化財の誕生」『歴史学研究』 126: 1-13, 59.
- 才津祐美子, 1996, 「『民俗文化財』創出のディスコース」『待兼山論叢』 30: 47-60.
- 財団法人あまがさき未来協会, 1996, 『ネオ・フォークロア入門——あまがさき発「街かど学」のすすめ』 神戸新聞総合出版センター.
- 島村恭則, 2018, 「民俗学とは何か——多様な姿と一貫する視点」古家信平編『現代民俗学のフィールド』 吉川弘文館 100-111.
- 竹田義之, 1993, 「『魅力ある文化の生まれる舞台』づくり——尼崎市の文化行政の展開」『TOMORROW』 26: 90-101.
- 羽間美智子, 1994, 「『尼崎の伝説』——図書館展示から冊子へ」『TOMORROW』 32: 96-108.
- 兵庫県立猪名川高等学校 地域歴史文化委員会, 1993, 『お年寄りに聞く 1992年版』 兵庫県立猪名川高等学校.
- 山下裕作, 2011, 「ふるさと資源化の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』 162: 239-270.
- Smith, Jimmy Neil eds., 1988, HOMESPUN: Tales from America's Favorite Storytellers, (=1992, 阿彦周宜訳『ストーリーテラーたち——現代アメリカのフォークロア』 大修館書店)

Folkloristic Storytelling in Producing Regional Resources: Case Study of “Neo-Folklore Movement” in Hyogo-Amagasaki

ABSTRACT

This paper focuses on how to transform folkloristic stories into regional resources through the case of Amagasaki City in Hyogo Prefecture. First, we will shed light on past folkloristic theory, practice, and outcomes along with knowledge obtained from social activities through a folklorist in Amagasaki. Then, we will focus on the case of Jonesborough City in America as a comparative example of performing folkloristic storytelling to produce regional resources. Through this perspective, we aim to reconfirm the “neo-folklore movement” in Amagasaki City in the 1990s, in which the cultural conditions paved the way for the expression of regional resources as folkloristic stories. This case study also shows how folkloristic experiences, knowledge, and expressions from this new point of view lead to a discussion on the relation between folklore and regional resources. It also appears to suggest that residents acquire the skills to narrate their individual lives as folkloristic storytellers. However, Jimmy Neil Smith, the proponent of the National Storytelling Festival in Jonesborough, insisted there were no secrets to becoming a storyteller and that it only required awakening one’s potential. Considering this, along with the description above, we show several instances of public participation through collecting folkloristic stories as regional resources.

Key Words: regional resources, folklore, storytelling